

男らしい、つてなんだ、といわれ

ると、「男の生きざま」とか「男のロマン」とかバカなことをいわない男のことである。

「男」を売り物にしている連中はただの、頭の悪いごろつきである。わたしが考える「男らしさ」とは、**自分を律し、謙虚で静かで、公平な男**のことである。こんなことをいまだに本気で考えている男、現在では、わたしだけかもしれない。

・・・

福沢諭吉の、朱に交わって朱(あか)くならない、という生き方がわたしは好きだ

現在では、上昇どころか、ただ「サステイナブル」(持続可能)であることだけに必死な時代である。

若い社員を見ていても、「そこまでやるか」という懸命な男は伸びた。「そこまでやらなくても」と斜にかまえる男は伸びなかった。なにごとにおいても**自分で自発的にやる人間**=セルフ・スターター (self-starter 自分で開始する者) でなければ使いものにならない。ひとにいわれて渋々やる人間や、いわれたことしかやらない人間=オーダー・テイカー (Order-taker 注文取り=指示待ち人間) は会社だけではない、人生全般においても通用しない。

酒は好きではないから、基本的に飲まない。

ホームレスに犯罪が少ないのが驚異的である。安い賃金で酷使されたり、その賃金からさらに搾取されている派遣労働者たちが、漫画喫茶やインターネットカフェで宿泊したりして耐えているのも驚異である。ほんとうに金に困っている者は犯罪を犯さない。まっとうに生きているのだ。犯罪者にもならず、まっとうに生きようとしたからこそ、ホームレスになるしかなかった、ともいえる。万引きをする者は金に困っているわけではない。ひったくりや恐喝や収賄などの犯罪を犯す者も、ほとんどが食うに困らない者たちである。「遊ぶ金」がほしい者がほとんどなのである。いったい、**どっちの心が弱いのか**。

衣食足りて礼節を知る、といわれるように、豊かになれば、心も寛大になると思われた。貧困と犯罪の相関関係にも一定の根拠はあるはずである。ところが現実はかならずしもそうではない。**金と心の問題は、どっちが大切かではなく、金に対する心の在り方だけが問題なのである**。たしかに金がないと心は逼迫する。金があると心に余裕がでる。けれどもはっきりいえば、こんな比較をすること自体、心に失礼な話なのだ。

どんな人間にも自尊心があるのだ。

わたしはなんのために生きてきたのか、知らない。まともに考えたこともない。何者なんだろう、と考えたことならあった。

文章を書き始めた動機は、自己救済だったのではないかと思う。このおれはいったいなんだ、と思ったのだろう。救済とは、これが自分だという核心と、自分はこのままでいいんだ、という確信を得ることだったはずである。このまま世間のなかで他人に伍して生きていけばいい、というような。幸せなど、頭に浮かびもしなかった。これまで幸せになりたいと思ったことは一度もない。ただ**自分という核心と確信がほしかった**のだ。自分の力をつけたかった。ヨーロッパに一年間行ったのも、内心は「原体験」の獲得という意味を帯びていた。

そんなこんなで十五年間、断続的に小さい文章を書き続けた。石原吉郎という詩人の生

き方に、自分とおなじような人間を見たと思った。三百枚ほどの「石原吉郎論」を書いた。それを見知らぬ編集者のO氏に勝手に送ったのがきっかけで、四十一歳のころだったか、最初の一冊、中島みゆき論が陽の目をみることになった。